

平成 1 1 年度

ロゴ貼り付け

稲作情報

中通り版  
第 5 号

平成 1 1 年 7 月 2 9 日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島県米稲作情報編集会議  
編集：福島県農業試験場

東北地方 1 カ月予報（7 月 2 3 日仙台管区气象台発表）

7 月 31 日～8 月 6 日：太平洋高気圧に覆われ、平年同様晴れの日が多いですが、日本海側を中心に前線や低気圧の影響を受け天気のごずつく時期があるでしょう。平均気温は平年並の見込みです。  
8 月 7 日～8 月 20 日：太平洋高気圧に覆われ、平年同様晴れの日が多いですが、前線や低気圧の影響を受け天気のごずつく時期があるでしょう。平均気温は平年並の見込みです。

生育状況

- 1) 作柄解析試験の稲の生育は、草丈がやや短く、茎数が平年並である。幼穂形成始期は、平坦部で平年より 2 日程度遅いが、高冷地ではほぼ平年並である。
- 2) 現地の稲の生育は、草丈が平年並からやや長く、茎数は平年並からやや多い。生育は平年並から 2 日程度早まっている。

表 1 作柄解析試験の幼穂形成始期と予想出穂期(月日)

場 所	移植日	品 種	幼穂形成始期		出穂期	
			本年	平年	本年	平年
本 場	5/ 1	ひとめぼれ	7.11	7. 9	(8. 4)	8. 2
		コシヒカリ	7.20	7.18	(8.12)	8.12
	5/15	ひとめぼれ	7.16	7.14	(8. 8)	8. 7
		コシヒカリ	7.24	7.23	(8.18)	8.16
冷害 試験地	5/20	まいひめ	7.11	7.10	(8. 4)	8. 4
		初 星	7.15	7.15	(8.10)	8.10

注)()内は未確定値

表 2 作柄解析試験の生育(本場 5 月 1 5 日植え)

品 種	年 次	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉 齢 (葉)	葉 色 (SPAD502)
ひとめ ぼれ	本 年	64.1	597	11.5	30.9
	前 年	65.0	584	11.6	31.3
	平年比・差	93	103	-0.2	-3.5
コシ ヒカリ	本 年	71.2	575	11.7	29.3
	前 年	71.3	508	11.9	29.3
	平年比・差	93	101	+0.1	-2.6

注)7月23日調査

移植栽培の技術ポイント

穂いもち防除と水管理の徹底により高品質米を生産しよう！

#### 1) 今後の生育予測

出穂期は、平坦部が平年並から 2 日程度早く、高冷地が平年並と見込まれる。今後、平坦部の早いところでは、初星、ひとめぼれが 8 月 4 日頃から、コシヒカリが 8 月 12 日頃から出穂期を迎えると予想される。高冷地では、まいひめが 8 月 4 日頃から、初星が 8 月 10 日頃から出穂期を迎えるものと予想される。

#### 2) 水管理

(1) 根の健全化と作土の固さを保つため間断灌漑を基本とし、登熟向上に努める。ただし、高温が継続する場合や台風襲来時には湛水する。

(2) 早期落水は穂いもちの発生を助長し、米質の低下を招くため、適期落水（出穂後 35 日頃）を守る。

#### 3) 穂いもち対策

7 月 16 日～25 日にかけて連続して穂いもち感染好適条件が出現したため、止葉や次葉などの上位葉での穂いもち発生が増加すると予想される。上位葉での穂いもち発生は、穂いもち発生を助長することから、穂いもち注意報が発令されているので、以下の点に注意して穂いもちを徹底防除する。

(1) 穂いもち対象の薬剤散布（散布剤）は、穂ばらみ末期と穂揃い期の 2 回を基本とし、上位葉（止葉・次葉）に穂いもちが多発していた場合は、傾穂期に追加防除を行う。

(2) 穂いもち対象の粒剤（育苗箱施用剤や水面施用剤）を施用したほ場でも、穂いもち発生を確認したら、穂いもち対象の薬剤散布を行う。

#### 4) カメムシ防除

カメムシの発生が多い地帯では、出穂後の防除を徹底し、玄米品質の低下を防止する。

#### 5) 稲こうじ病対策

穂ばらみ期から出穂期にかけての降雨によって、稲こうじ病の発生が助長されるので、常発地を中心に予防を徹底する。

#### 6) 追肥

コシヒカリの穂肥は生育量と葉色の診断により行う（第 4 号参照）。カラ・スケ・ル値が 3 以下の場合、減数分裂期に 10a 当たり 1.5～2kg の窒素を追肥する。また、追肥した場合は、いもち病の防除を併せて行う。出穂期以降の追肥は、穂いもちの増加や食味の低下を招くので施用しない。

## 技術ポイントの基礎データ等

表3 コシヒカリの稈長および初数等の予測例

幼穂形成期の生育			成熟期の予測値		
草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉色 (カ-スケ-ル)	初数 (百粒/㎡)	稈長 (cm)	倒伏程度 (0~400)
70	600	3.0	288	87	160
70	600	3.5	310	91	240
75	600	3.0	292	89	200
75	600	3.5	314	93	280

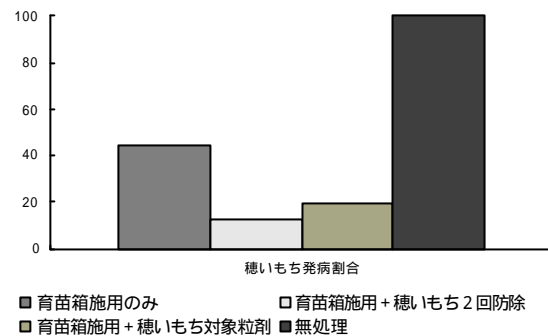


図1 育苗箱施用剤を基幹としたいもち病防除体系別の穂いもち防除効果  
(無処理の穂いもち発病程度を100とした場合の体系別発病程度)

## 直播栽培の技術ポイント

### —— いもち病の徹底防除と倒伏防止に向けたほ場の固化に努めよう！ ——

#### A 湛水直播

##### 1) 生育の状況

場内の生育は、草丈がやや長く、茎数がやや多い。5月上旬播種のコシヒカリまで幼穂形成始期が確認された。現地での生育は、ほぼ順調であるが、葉いもちの発生が各地で見られる。移植稲との生育ステージの差は、3～7日程度と推察される。

##### 2) 当面の技術対策

- (1) 間断灌漑を継続して、できるだけ田面の固化をはかり、倒伏防止に努める。このため、台風襲来時や粒剤の施用時を除き、長期間の湛水管理は、絶対に避ける。
- (2) 幼穂形成期を確認後、移植に準じた診断により穂肥を施用する。ただし、株元が不安定な場合や苗立ちや茎数が過剰な場合、品種がコシヒカリの場合は、施用を遅らせるか、または中止する。なお、明らかに倒伏が予測されるほ場では、倒伏軽減剤を使用するとともに、ほ場の排水対策に全力を尽くす。
- (3) 当面、移植稲と同様に葉いもち防除を徹底する。穂いもち防除にあたっては、生育ステージが移植稲よりも遅れるので、移植栽培とは別の防除体制をとる。苗立ちが過剰なほ場での紋枯病発生や生育の遅れによるイネツトムシの発生にも十分注意する。

#### B 乾田直播

##### 1) 生育の状況

場内試験の生育は、草丈、茎数ともほぼ平年並である。移植稲との生育ステージの差は、湛直と同様に3～7日程度の遅れと推察される。  
現地における生育は、草丈がやや短く、茎数がやや少ない。生育ステージは、地域やほ場間でバラツキが大きい。湛直よりやや遅れている。

##### 2) 当面の技術対策

- (1) 水管理は、間断灌漑を継続する。出穂後の高温時の落水管理や早期の落水は、極端に登熟を早めて品質を低下させるので絶対に行わない。
- (2) 幼穂形成期を確認したら10aあたり2kgの窒素追肥を実施する。
- (3) 病害虫防除については、湛水直播に準じて行う。

## 技術ポイントの基礎データ等

表4 湛水直播稲の生育状況 (本場作柄解析試験)

品種	年次	播種日	調査日	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)	幼穂形成 始期(月日)
ひと	99年	5. 7	7.23	66.4	770	10.9	37.0	7.23
めぼ	98年	5. 8	7.24	64.7	597	10.3	32.3	7.23
れ	97年	5. 9	7.22	56.6	451	-	31.3	7.24
	96年	5.10	7.22	51.0	740	10.4	38.2	7.24
コシ	99年	5. 7	7.23	70.3	607	10.9	33.1	7.27
ヒカ	98年	5. 8	7.24	70.3	780	10.0	29.0	7.30
リ	97年	5. 9	7.22	59.8	454	11.4	31.6	7.29
	96年	5.10	7.22	51.6	821	10.9	36.9	7.28

表5 乾田直播稲の生育状況 (本場作期試験)

品種	年次	播種日	調査日	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	幼穂形成 始期(月日)
ひと	99年	4.23	7.23	58.6	490	7.24
めぼ	98年	4.22	7.24	55.4	388	7.27
れ	97年	4.23	7.24	70.7	520	7.23
	96年	4.25	7.29	60.7	384	7.27
コシ	99年	4.23	7.23	66.3	667	7.27
ヒカ	98年	4.22	7.24	66.1	465	7.29
リ	97年	4.23	7.24	72.9	507	7.28
	96年	4.25	7.29	76.7	703	7.28

## 麦・大豆栽培の技術ポイント

- 1) 大豆の追肥 最終培土時の追肥ができなかった場合は、開花期～開花後10日頃までに硫酸または尿素で窒素成分6kg/10aの追肥を行う。
- 2) 大豆病害虫の防除 子実害虫の防除は、紫斑病防除も併せて開花期後20～40日までの間に必ず実施する。
- 3) そばの播種 そばは土壌適応性が高いが、湿害に弱い排水対策が重要である。また、無肥料では多収が望めないため、10a当たり窒素1.0～2.0kgリン酸2.5～5.0kgカリ2.5kg程度の基肥を施用する。前作の肥効が残っていると思われる場合は基肥窒素を施用せず、生育状況により開花始めまでに追肥を行う。

次号の発行は8月27日の予定